

岩上はる子、惣谷美智子（編著）
『ブロンテ姉妹と 15 人の男たちの肖像
——作家をめぐる人間ドラマ』

ミネルヴァ書房、2015 年、3,800 円、326 頁

大田美和

本書は、『シャーロット・ブロンテの生涯』を執筆したエリザベス・ギヤスケルとその研究者にとって少なからぬ関わりを持つブロンテ姉妹についての論集である。ヴィクトリア朝中期を生きた作家と作品の研究はいかにあるべきかということについて優れた示唆を与えてくれる書物であるため、日本ギヤスケル協会の会員諸氏にも推薦したく、そのあらましと意義について論じたい。

本書の始まりは「まえがき」によれば、2011 年発行の英国の『ブロンテ・スタディーズ』第 36 巻第 1 号の特集“Men in the Brontës’ Lives: Influences, Publishers, Critics, and Characters”「ブロンテの生涯における男たち——影響力、出版人、批評家、登場人物」だったという。それが日本ブロンテ協会 2015 年大会（於 滋賀大学）の「ブロンテ姉妹と男たち」というシンポジウムの開催につながった。そのときの「男たち」は 4 人に過ぎなかったが、シンポジウムの中心メンバーの岩上はるこ氏と惣谷美智子氏の想像力は、シャーロット・ブロンテの小説『ヴィレット』の中で、主人公ルーシー・スノーが引用する、『千一夜物語』のペリ・バヌーの掌に納まる伸縮自在のテントのごとく、果てしなく広がって、読み応えのある一冊の書物に結実した。斬新な発想と、他の追従を許さない構成力と編集力を感じさせる書物である。

編者はともに日本ブロンテ協会の会員だが、日本ブロンテ協会会員だけが寄稿した論集とは一味違うことも、本書の魅力の一つである。ブロンテについては偶然か意図的か、これまで書いたことのないような研究者をも巻き込んで、異色のブロンテ本となった。このような言い方をすることを、私自身日本ブロンテ協会会員であって、会員諸氏との協同によりブロンテ研究にささやかなりとも貢献してきたことに誇りを持っていることに免じてお許しいただきたい。以下、全 15 章の中から、筆者の興味を特に引いた章について紹介し、コメントを加えてみる。

第二章「ブランウェル・ブロンテ——一家の希望の星、あるいは敗北者」（廣野由美子）は、ブロンテ研究の中では近年再評価のめざましいブランウェルを取り

上げる。ジュリエット・パーカーの評伝を引用しながら、ブランウェルとシャーロットの意外な共通点を整理して述べ、そこからシャーロットがいかにブランウェルを踏み台にして、一人前の作家になるべく努力したかと論じる。興味深いのは、出版した詩集がほぼ黙殺されたにもかかわらず、小説執筆と出版へと気持ちを切り替える姉妹たちの元気の元の分析である。「これまで期待をかけてきた男のよろさを知り、自分たちが男になり替わろうという気持ちに踏み切れたのではないだろうか」、「失明しかけた父親と、病床に伏したきょうだいという介護の必要な二人の男性に代わって、自分たちこそ、将来を切り開く主導権を握っているのだという自覚」(39)という指摘には、ブロンテ文学が「ケアの時代」である現代に、どのように接続し、新しい読みを開くことができるかという可能性を示してくれる。

第四章「スミス・エルダー社社主ジョージ・スミス——出版界の貴公子」(岩上はるこ)は、『ジェイン・エア』を出版した出版社社長のみならず、シャーロット・ブロンテの良き助言者となった原稿閲読者ウィリアム・スミス・ウィリアムズと、インド転勤前にシャーロットに求婚して拒絶された人事主任ジェームズ・テイラーの3人について「スミス・エルダー社の男たち」として取り上げている。著者はシャーロットの親友エレン・ナッシー宛ての手紙に、スミス・エルダー社で働く男たちを、シャーロットが観察し値踏みしている様子を読み取る。そして通常の伝記の記述では、結局美人好みのスミスは不細工なシャーロットに本気で恋愛感情を持ったわけではなかったとまとめられるものを、「今ではジョージとわたしはおたがいのことをとてもよくわかりあっていると思います」という意味深長な手紙の一節を引用し、通常恋愛相手に求められる「年下の美人の女性」という条件にあてはまらないことを安全弁として、高等教育を受けていないスミスから知的優位性による尊敬を勝ち取り、姉のような存在になれたことに、シャーロットがまんざらではない様子であることを指摘する。ここには異性とのさまざまな親密な関係を、現実にも虚構世界においても体験しつくすことによって、表現を磨きたたかな作家像が立ち上がっている。

第六章「G. H. ルイス——「尊敬の念」と「悔しき」と」(谷田恵司)のG. H. ルイスは、作家ジョージ・エリオット(メアリアン・エヴァンズ)の生涯のパートナーである評論家・ジャーナリスト・小説家だが、エリオットの側から見える顔と、ブロンテの側から見える顔がなぜかつながりにくい。ブロンテもエリオットも研究する研究者は多いにもかかわらず、ずっと気になっていた問題である。ここでは「敵に対しては身構えることができますが、神よ、わたしを味方からお守りくだ

さい」というシャーロットの怒りに満ちた手紙の元となった、ルイスの女性蔑視的な『シャーリー』批判の背景に、妻が親友の子どもを妊娠するという事態に葛藤するルイスの姿を見いだしている。ルイスと妻と親友の関係の真相については論証しきれないところもあるため、即断を下してはいないが、シャーロット・ブロンテと G. H. ルイスの出会いについて、「二つの極めて個性あふれる知性が出会った」「二人とも熱心に個性ある文筆活動を行うとともに、私的な側面で重い事情を抱えながらも懸命に生きていた。この二人があるときにふと触れ合い、刃がぶつかり合って、小さいけれども激しい火花が飛んだ。そのきらめく光を我々はここで目撃したと言えるだろう」(127)という言葉に、文学を愛する者として共感した。

第七章「W. M. サッカレー——自伝性と匿名性をめぐって」(新野緑)は、ディケンズを中心にヴィクトリア朝小説について論じてきた研究者がブロンテについてのどのように論じるかを見せてくれる。シャーロット・ブロンテのサッカレーに対する献辞(『ジェイン・エア』第二版)とそれが招いた「作者はサッカレーの愛人であるガヴァネス」という「風評」は有名である。また、『ヴァレット』の『ジェイン・エア』とは異なる価値を信じる者にとっては、サッカレーが私信で、二人の男を同時に愛していると告白するヒロインに対する嫌悪感と、一生結婚できそうにないブロンテという持参金も美貌も持たない女に対する憐みを明らかにしていることを忘れることができないが、著者はそのような私怨にはとらわれず、二人の作家の相互的な影響を冷静に丁寧に論証していく。とりわけ『ペンデニス』のウォリントンと『ジェイン・エア』のロチェスターの対照と、そこから読み取れる例の風評に対するサッカレーのブロンテに対する屈折した感情と世間への揶揄を分析するところは、読みごたえがあった。サッカレーとブロンテについては、いまだ解明されていないブロンテのユーモア、ウィットと諷刺という問題からも、両者の類縁性についてさらなる分析を今後期待したいと思った。

第十章「シン・ジョン・リヴァーズ『ジェイン・エア』——ミSSIONナリーの欲望の真相」(市川千恵子)は、「この章は、終わりから始める——つまり、物語の後半から登場し、結末において不在でありながらも強い存在感を放つシン・ジョンに焦点をあてる」という大胆な宣言から始まり、シン・ジョンの有力モデルであるパトリック・ブロンテの友人であった宣教師ヘンリー・マーティンを理想と仰いだ、宣教師ヘンリー・ワトソン・フォックスの書簡の緻密な分析によって、中流階級の男性の男性性の構築と、中流階級の女性の主体性の証明と、帝国の微妙な関係を論じている。最近の簡便なブロンテ研究入門書では、ガヤトリ・チャクラヴァオティ・

スピヴァクの業績が省略されているものを多く見かけるが、本章は難解なスピヴァクから始まる高度に専門的な議論を深めながら、一般読者にもわかりやすい議論を展開している手腕に感嘆した。

第十一章「ヒースクリフ『嵐が丘』——その「男」を考える」（鶴飼信光）は、本書のテーマである「男」という問題をもっとも積極的に引き受けて、果敢に迫っているように思われる。テリー・イーグルトンのマルクス主義批評とギルバートとグーバーのフェミニスト批評、廣野由美子『『嵐が丘』の謎を解く』（創元社、2001年）、自著『背表紙キャサリン・アーンショー』（九州大学出版会、2013年）を引用しながらも、日常的なレベルで理解可能な「男」というキーワードを使って論を進めている。ジェンダー論の方法を取らないため、キャサリンに奴隷のごとく仕えるヒースクリフはジェンダー的には〈女〉だとは言わず、彼はロマンスの騎士であり、それが女性読者の欲望を刺激するとしている。既成の言葉や概念では表現しがたいキャサリンとヒースクリフの強い結びつきについて、「キャサリンのヒースクリフへの愛が、ヒースクリフが「男」でなくてもかまわないという特異なものだったこと」（215）から始めて、「キャサリンの悲劇は、ヒースクリフとエドガーという二人の男に「男」でなくなることを求め、それがかなえられないことから生じている」（227）という結論は言い得て妙である。

第十二章「エドガー・リントン『嵐が丘』——書齋の紳士」（中尾真理）は、デイヴィッド・セシルの「嵐」と「静穏」の対比の引用から始めて、ブロンテよりもジェイン・オースティンの世界を愛するような読者から見た、『嵐が丘』のメロドラマ的で異様な世界の混乱状態を、書物の力がどのように静かに治めていくかを論じている。現代の大学生やヴィクトリア朝の読者のように、『嵐が丘』の異様さに訳も分からず圧倒されるのではなく、メロドラマと混乱の部分もゴシックや復讐物語として文学の伝統の中で説明できると冷静に論じる。読みながら、ヒースクリフの帰還直前のリントン夫妻の最後の平穏な姿と、キャサリンの病床にエドガーがクロッカスを届ける場面を思い出し、『嵐が丘』というよりはゴンドル物語の痕跡を残しているような、詩的で美しい場面をエミリー・ブロンテがエドガーのために残したのはなぜかということ、改めて考えてみたくなった。

第十三章「ヒンドリー・アーンショー『嵐が丘』——内なるアウトサイダー」（山内理恵）は、ヒースクリフの復讐の動機を作ったという点でのみ注目されがちなヒンドリーについて、「家長長制のインサイダーでありながらもアウトサイダーに追いやられて破滅する」点に注目して、見落とされがちな彼のまともさ（通常のや

さしや思いやりを持つが精神的に弱い人物」(271) をすくい上げ、バイロンとド・クインシー、ブランウェルとエミリ・ブロンテという現実の人間たちの葛藤に満ちた経験に照らし合わせながら論じている。

第十四章「ポール・エマニュエル『ヴァイレット』——第三の「ロマンティック・ヒーロー」」(惣谷美智子) は、ロチェスターとヒースクリフをめぐるパツィ・ストーンマンのロマンティック・ヒーロー論の検証から始めて、ドイツ・ロマン派画家カスパー・フリードリヒとバイロンの『マンフレッド』に及んでいる。そして「現実の人間」が透けて見える「ポール」には、いくつかの「^{キルグ}自分」があるのだろう」と結論して、作者のブリュッセル体験に矮小化されがちなヒーローの多面性を、ヴァージニア・ウルフのモダニストとしての「人には優に数千もの自分があるといってもよい」という人間理解につないで、シャーロット・ブロンテという作家の現代性に今後の議論を開いている。

以上、15名の寄稿者からなる論集を、好みの「男」を選んで論評を加えるような不完全で不公正な書評になってしまった。他に取り上げられている「男たちは、パトリック・ブロンテ、コンスタンタン・エジェ、アーサー・ベル・ニコルズ、チャールズ・ウェルズリー、エドワード・ロチェスター、アーサー・ハンティンドンである。論評を加えることができなかつた章については、読んでのお楽しみということにしたい。

三部から成る本書の第一部、第二部、第三部の扉には、市原順子(荷葉)氏による印刻が置かれて、扉を飾っている。この印刻は元々、日本ブロンテ協会会員で2013年に急逝した田村妙子氏が注釈をつけ大学の授業で使える教科書として出版した『絵と原文で楽しむ Agnes Grey』(大阪教育図書、2000年)の挿絵として使われたものである。精魂込めて世に送り出した著書の挿絵が、このような形で別の書物の中で新しい命を得たことに、泉下の田村妙子氏は喜んでおられるのではなからうか。文学書に育てられた恩義を忘れない者ならではの心憎い配慮がうかがわれ、岩上・惣谷両氏の文学と書物に対する愛に改めて感じ入った。

最後に、今の時代に文学研究書を出版する意義について、歴史学の分野で最近出版された書物から得た示唆に触れながら、考えてみたい。歴史書の出版に編集者として関わってきた有志舎の永滝稔氏は、「歴史学・学術書・読書の新たな関係を考える」という論文で、専門書と教養書という分類は専門家にとってしか意味がないと指摘し、学問を広めるためには教養書だけではなく、専門書もどうすれば一般読者に読んでもらえるのかを考えなければいけないと主張する(歴史学研究会編『歴

史を社会に活かす——楽しむ・学ぶ・伝える・観る』東京大学出版会、2017年、182)。この名編集者の「・・・これまでの歴史像や学説、研究傾向・研究言説に正々堂々かつ公然とケンカを売するような内容でないと売れないし、そもそも私自身が興味を持って出版する気になれません」(184)という発言を読むと、このような編集者と仕事がしてみたいと心から思う。

文学書の場合は、文学書と読者の間に、文学を愛好し文学表現に心血をそそぐ者が入るために、問題は歴史書以上に複雑になると同時に、可能性も広がるだろう。文学とは、知性にも感性にも訴えるものだからである。こうしてみると、『ブロンテ姉妹と15人の男たちの肖像』は、言語と文学の教育に携わっているイギリス小説研究者が、苛烈な消費社会の中で鍛えられ、妥協せずに優れた出版物を工夫して世に送り出す知恵と力を身につけたことを示す、絶好の例であると言ってもいいのかもしれない。

(中央大学教授)